

重度・重複障害幼児の集団療育（7）

— 家族力動のまとまりと安定への過程 —

村上英治 森崎康宣¹⁾ 後藤秀爾²⁾
加藤礼子³⁾ 中 美由紀⁴⁾

I. 問題と目的

私どもの集団療育は、障害児に対する諸般の施策の進展にも伴って、1980年代に入り、とりわけ重度重複の障害幼児を、その対象とするようになってきた。そうした対象児の重度化につれ、私どもの療育の視点も、単に、子どもの療育と母親の指導というのみにとどまらず、父親やきょうだいをも含めた形での家族全体を援助しようとするものになってきている。

そうした視点に立っての検討として、これまで私どもが行ってきたものには、障害児をきょうだいにもった健常児の発達課題を明らかにすることにより、その援助の方向を探ろうとしたもの（後藤ら1982 a）、とかく育児は母親任せという構造になりやすい父親を療育に巻き込み、どのようなパートナーシップをとるべきかの方向を模索したもの（後藤ら1983）、さらに、同窓会のような試みを通して、家族全体のまとまりを考え直すきっかけを作り得ないかということ調査したもの（村上ら1984）などがある。私どもが、そこで目指してきた実践は、家族が障害児をもったという運命をただ受容するだけでなく、より積極的に、障害児を中心として、あるいは障害児をもったがゆえにこそ、その子どもを中心に、共に育ち合えるだけの構えと力をもつことへ向けての援助活動であった。

* 本研究はトヨタ財団昭和58年研究助成金（助成番号83-2-Ⅲ-047）の援助を得て行なわれた継続研究の一環をなすものである。尚、本論文の要旨は東海心理学会第34回大会において発表された。

- 1) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程（前期）
- 2) 愛知学泉女子短期大学
- 3) 名古屋大学心理教育相談室
- 4) 名古屋大学教育学部研究生

子どもの障害が重ければ、母親1人で、その介護を引き受け、他に家事、育児の一切を背負うことは困難になる。両親が協力し合うことを余儀なくされ、家族の凝集性を高める力となり得る可能性が生じる。両親がそろって療育の場へ参加してくるようであれば、そうした方向への展開がかなりの確率で期待できる。またかりに、父親の構えが消極的であった場合においても、母親自身が子どもと自己の運命を受容し、前向きの生き方を獲得してくることを転機として、徐々にではあっても、協力的な方向へと、その構えを変容させ得ることも、これまで経験してきた（後藤ら1982 b）。

私どもの療育グループにあっては、この数年、幸いにもほとんどの父親たちが、私どもの誘いかけに応じて、活動に参加の姿勢を表し、積極的に母親との協力態勢を作っていく構えを私どもに示してくれた。そうしたグループ全体の雰囲気も手伝って、父親も子どもの養育に関与するという方向性で、どの家族も力動関係が動いていき、ある一定のまとまりをもって安定する様子を見せてきた。そのまとまり方と、そこへ到るプロセスは、それぞれの家族の歴史性と力動関係の変遷の中で、さまざまであるが、その方向性としては、かなり共通のものがあると考えられる。私どもは、これまでも、およそ次のような3つのタイプの家族のまとまりのあり方を想定してきた。

タイプⅠ. 障害児自身を中心にまとまる家族

タイプⅡ. 障害児を介護する母親を中心にまとまる家族

タイプⅢ. 健常児きょうだいの存在によりバランスをとってまとまる家族

私どもの療育グループに参加している間に、こうした方向性で家族力動が展開し、一応の安定を得たと思われる場合も、そうした方向性を持ち得たのみで今後課題を残したと思われる場合もあったが、経験的にはほぼこの3種類のパターンを想定しておくことは、家族への援

助の視点を私どもが今後も考えていく上で、有効であるということが出来る。

今回は、私どもの療育活動に、ここ3年間にわたって参加し続けてきた3家族を中心として、障害児を核に、それぞれの家族がまとまりと安定を得ていく力動関係の変容過程を検討しようとしている。その3家族は、一応、この検討の段階で、力動関係が安定しており、両親、きょうだい共に、現状を肯定的に受け容れていると見られ、上記の3つのタイプをそれぞれ代表すると考えられた家族である。

今回の検討を通して、家族全体に対するよりきめの細かい対応のための視点や配慮を、私どもは、得たいと考えている。

II. 対象と方法

1980年度以降、私どもの療育グループに参加してきた、いわゆる重度重複の障害児を持つ家族は、およそ13家族になる。それらの家族の状態をも考慮に入れているが、主として、今回検討の中心としたのは、1981年度より3年間継続して療育グループに参加してきた3家族である。（図1にそれぞれの家族構成を示した。）

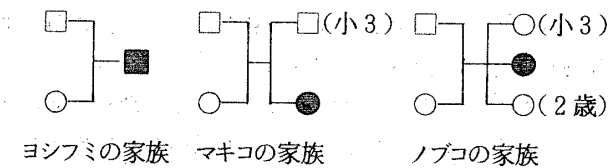


図1 3家族の家族構成

その3家族に対しては、家族成員布置テストと私どもが呼ぶ手法を導入した面接を行った。これは家族力動の変化を視覚化することにより、両親が内省しやすくするために考案したものである。

茶色の枠を画いた八つ切り画用紙と家族成員1人ずつを表す円形チップを用いた。次のような教示に従って、両親に現在、療育参加以前、将来の3時点で、心理的に一致するようにチップを画用紙に置いてもらった。面接は両親と療育スタッフの2人、計4人が同席で行った。

家族成員布置テストの教示

① お父さん、お母さんの気持ちの中で、家族の1人1人がどんな位置付けになっているのかについて伺います。今、感じているまを直感的にあらわしていただければよいのです。あまり考えすぎると、かえって分らなくなるかも知れません。

この紙の中に画いてある四角の枠は、家のイメージをあらわしているものです。家族というものの枠といってもいいかも知れません。物理的なものではなく、気持ちの上での

心理的なものです。

まず、この家の中でXちゃん（対象障害児の名前）が、どの辺りに位置しているのか、その位置に、このチップを置いてみてください。お父さんとお母さんの気持ちの中で、Xちゃんがどの辺りにいるのかということです。

* 同じようにして、きょうだい、父親、母親の順に問う。その他、家族にとって重要な意味のある人、密接な関係のある人がいれば、その人についても問う。

② 今、こうしてチップを置いていただいて、家族がこういう関係になっているというイメージを示してもらったわけですが、お父さんのチップがここに収まったということは、どういう意味だと感じてみえますか。

つまり、今、お父さんが家族の中で、どんな役割を果たしていることで、家族がどのようにまとまっていると感じているのかということです。

* 同じようにして、母親、障害児、きょうだいの順に問う。主眼は両親間の力動関係にある。

③ では、次には、このようになってくる前、具体的には名大に通い始めた3年前には、どのような具合だったのか、このチップを置いてみてください。

* ①で、置かれたチップの修正を求め、全員の修正が終わったところで、その修正理由を尋ねる。

修正理由を聞く中で、3年前の両親の家族内役割意識を確かめる。

④ 将来、どのようになっていけば、今よりもっと良い感じになると思えますか。

チップを置いていく過程、その際の両親の話し合いの過程が記録され、それぞれの場所にチップを置いたことの明確化がなされた。またチップの大きさを変えたとしたらどうか、この子の誕生前ではどうであったかをも付加的に尋ねた。

この面接は1985年4月14日から4月24日に、各家庭で行った。

なお、考察にあたっては、これまでに重ねてきた家族との面接、連絡ノートの記述内容なども参考として用いた。

III. 3家族のまとまりの過程

1. ヨシフミの家族

a) 家族成員布置テストを用いた面接の要点

《 》は療育者による質問の要旨である。

もっぱら父親主導の下でチップが置かれていく。

〔現在〕

父親が即座に画面の上の方からヨシフミ・母親・飼い猫・父親の順に並べ（図2-a）「ヨシフミがいるから家がまとまっている。」

母親「お父さんが3人を支えている。」「（チップの置き方は）ヨシフミが真ん中にきて、お父さんがはみ

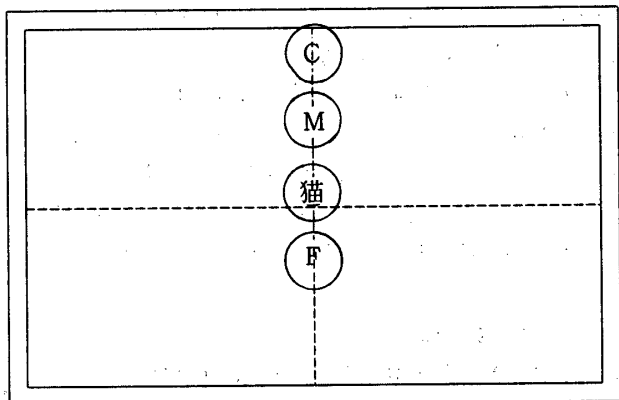


図2-a ヨシフミの家族（現在）

出さないように全体が下がる。」

《お母さんの役は》

母親「ヨシフミの身の回りの世話をしている。」

父親「ヨシフミのおかげで人間観が変わった。ヨシフミがいるから、家に落ち着いている。生活の中にヨシフミがいるのではなく、ヨシフミがいるからこそ生活がある。」

《チップの大きさを変えるなら》

ヨシフミを画面一杯にする。(図2-b)

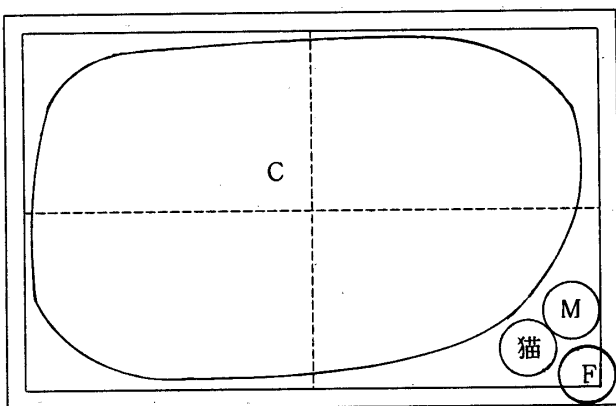


図2-b ヨシフミの家族（現在・大きさのイメージ）

《猫は》

父親「お母さんの気持ちが晴れる。」

母親「ヨシフミの具合が悪い時に、寝ずにいる。そんな時、猫が来ると気が晴れます。それで、猫が必要なんです。」

〔療育参加前〕

(図2-c) 飼い猫がいないだけで、現在と変わりなし。

〔将来〕

家族のあり方は現在のままで理想と述べる。

父親「しいて言えば、この子のような子どものために働

いてくれる子どもを育てる施設を作りたい。」

「ヨシフミが生まれて器が大きくなったように思う。

神に感謝している。」

〔ヨシフミの誕生日前〕

父親「お母さんは家を守って、私は外で金儲けに走っていた。」

母親「私が従業員とお父さんとの接点になっていた。」

(図2-d)

父親「ヨシフミが、ちょっとおかしいなと分かってから

は、こうなった。」(図2-e)「生まれた以上は、

生ある限り、この子に尽くさないかん。それが神

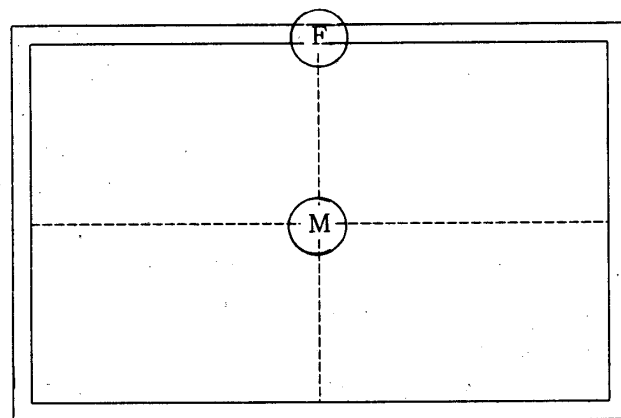


図2-d ヨシフミの家族（ヨシフミの誕生日前）

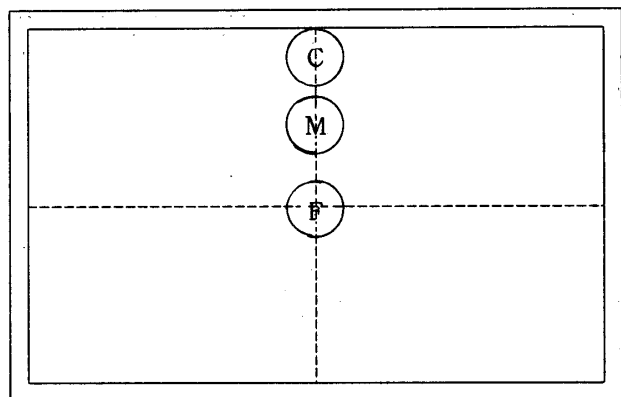


図2-c ヨシフミの家族（療育参加前）

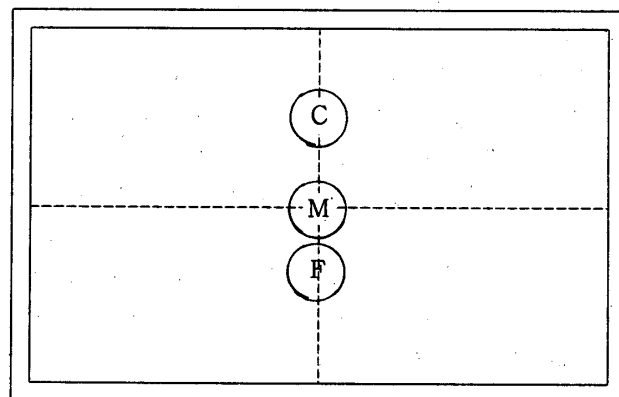


図2-e ヨシフミの家族（障害が分かった後）

の与えてくれた生き方だということで、ごく当たり前に、こういう生活に変えたってことです。ヨシフミが精一杯生きている姿を見て、ホロッとする時があります。教えられることが多いんです。生きるってこと自体の尊さっていうか。」

b) この家族のまとまりの構造

ヨシフミの家族は、療育開始当時より「我が家は、この子を中心にすべてが動いています」と明言し、ヨシフミを大切に育てるために、第2子は作らないということを手をサラーと断った。ヨシフミが生まれたことにより、父親は従業員を使ってかなり手広くやっていた商売をやめ、家に居る時間の十分にとれる現在の職業へと転職している。ヨシフミが生まれたおかげで、「人間の暖かさ」を知り、人生観が「考えられないような180度の転換」をしたと述べる父親の確固たる信念が、この家族を支える力となっているといえる。母親がヨシフミの介護に専念できるようにと、父親は日用品の買い物も、食事の準備や片付けも、まさに一手に引き受けて、実質的にも一家を根底から支える役まわりをとっているであろう。父親自身は、「自分が一番しいたげられ、とき使われている」といい、母親もそれに同調して、「私もだんだん図々しくなりました」と笑っているが、一方でふたり共に声をそろえて、「今が一番幸せですね」としみじみ語る口調には実感がある。ヨシフミが生まれ、その生命を支えるためには、現金収入がいくらあっても意味がないと悟ったところに、おそらくはこの両親の精神生活に転機がおとずれたのであろう。母親自身も、収入は減ったものの、ヨシフミのおかげで、父親が緊張の高い仕事を放棄して、いつでも必要な時には家にいてくれるという、現在のこの安定した生活にうつつたことを心から喜んでいるようであり、客観的に見ても、ヨシフミに注ぐ愛情は献身的なものがある。かといって、そのことで、自分達の生活の中に閉じ籠り、ヨシフミを密着的に取り込むことなく、ヨシフミを連れて、またヨシフミを核としての社会的交流を拡げることにも積極的である。

この両親は、私どもの療育グループに加わるようになって間もなく、家に迷い込んできたノラ猫を飼い始めた。この猫は、歩行困難のいわば「身体障害猫」であって、これにも、さまざまな象徴的意味があるように思われる。父親が「私どものグループに参加して、人のやさしさとか、思いやりを実践するという姿を、本当に教えられた」ということを、再三述べているが、ひとつには、そうした「思いやりの実践」を内在化できたことの証しであるのかもしれない。また、別には「美猫だといってやるとすごく喜ぶ」といった形で猫を語る母親にとっては特に、

この猫がヨシフミのきょうだいのような存在となっているようにも見受けられる。

このヨシフミの家族は、飼猫の存在で微妙なバランスをとりながらも、基本的には、ヨシフミが一家の中核であるという信念と信条で揺るぎがない。将来的にも、このままでよいとする両親の言葉は、強がりでもタテマエ論でもない真情として、私どもに伝わってくる。

2. マキコの家族

a) 家族成員布置テストを用いた面接の要点

《 》は療育者による質問の要旨である。

母親が主導権を取り、父親が修正する。手を出して動かすのは、主に母親である。会話は多くなされる。

〔現在〕

母親、父親同時に「難しい。」

母親「こうだわね。」

父親「お母さんはマキコにピッタリじゃない？」

母親「こう？ピッタリじゃないでしょ。どうか？」

(図3-a)

《お母さんとマキコが、くっついているというのは》

母親「行動をいつも共にしないといけないから。お父さ

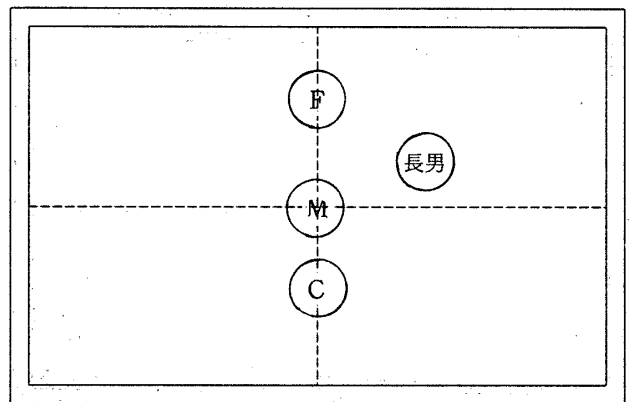


図3-a マキコの家族（現在-1）

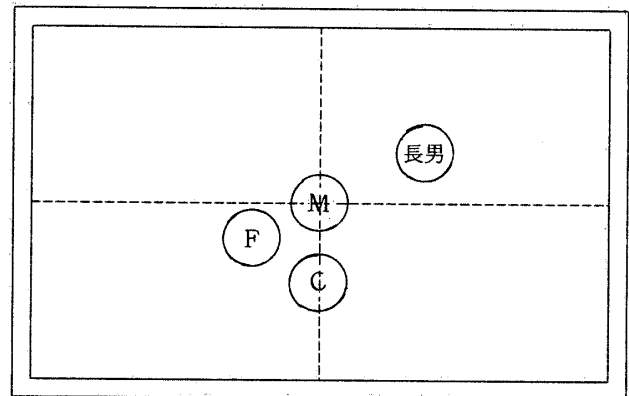


図3-b マキコの家族（現在-2）

んは、やや傍観者のなかんじ。いつも、こう。」

父親「まあ、離れているわね。」

母親「お兄ちゃん、お父さんの回りをフラフラしている。」

父親「お母さんとマキコの回りの方が多いんじゃないかな。」

《お母さんが真ん中にあるのは》

母親「私がいなくて家の中は真っ暗闇。精神的には父親に支えられている。(母親のチップを父親のチップに寄せる)」

父親「気持ちの上では母親-マキコと等距離にいる。」

(図3-b)

母親「お兄ちゃんは、もう放ったらかし。」

《お父さんの役割は》

母親「見ていて、時々口を出す。」

《どういうことに口出しするの》

父親「比重はお母さんとマキコの方。」

母親「助言かな。最終決定は自分でするから。」

《チップの大きさを変えるなら》(図3-c)

母親「マキコあっての私ですから。こう、マキコが中にある感じ、マキコがいなかったら、もっと自由にやっていると思うけど、みんな、それぞれバラバラにやっているかもしれない。」

(療育参加前)

(図3-d) 《お父さんは、今と同じ?》

父親「もっと近かった。行動的ではなかったけれど。最初は、どうやっていいのか分らなかった。段々自信がついてきた。」

母親「私もやれる自信がついてきて、療育参加1年目の海水浴への合宿の時から、おばあちゃんは、もういらなくなった。」(図3-e)

《お兄ちゃんは、今よりも近い?》

母親「小さかったから、まだ心配だった。今は、もうな

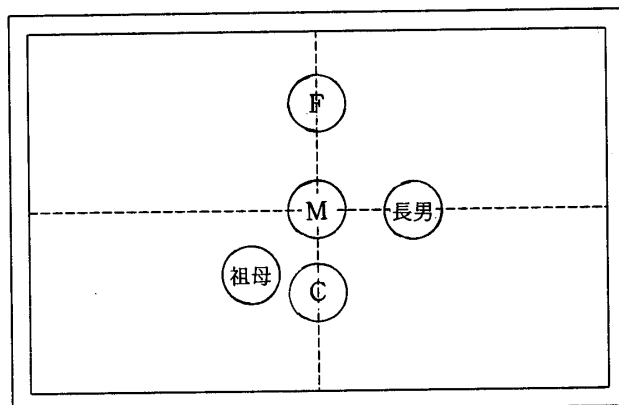


図3-d マキコの家族(療育参加前)

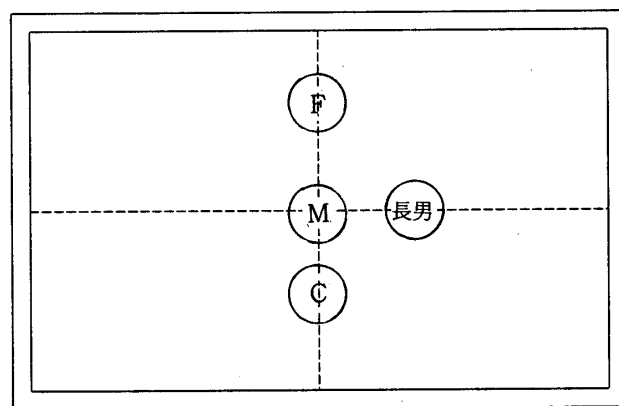


図3-e マキコの家族(療育参加1年目の海水浴後)

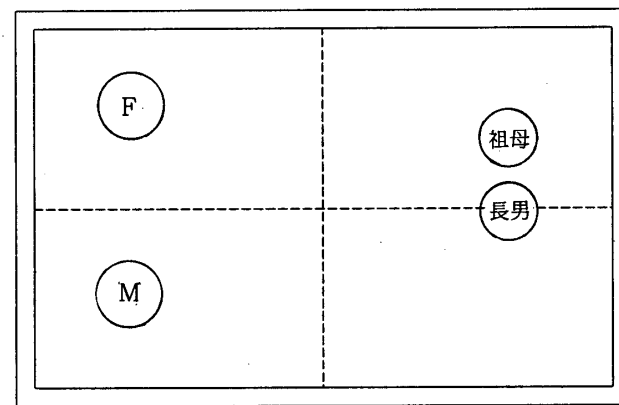


図3-f マキコの家族(もしマキコがいなかったら)

るべく自立心をつけないといけないから。」

《もしマキコがいなかったら、バラバラというのは?》

母親「お兄ちゃんを中心にして、お父さんと私がそれぞれ見ている。」

《マキコがいなくて、実際にはどうだったか》

母親「こういうふうじゃなかったかな。(図3-f、祖母が入っていない)何かあれば、まとまるけど、何もなければ、それぞれにやって。おばあちゃんは、お兄ちゃんの傍ですね。」(図3-fに祖母を加える)

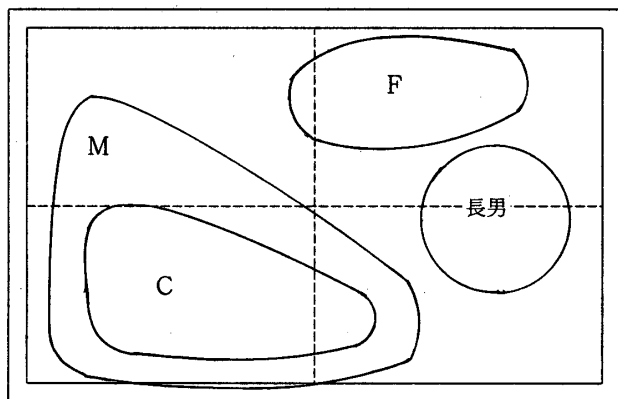


図3-c マキコの家族(現在・大きさのイメージ)

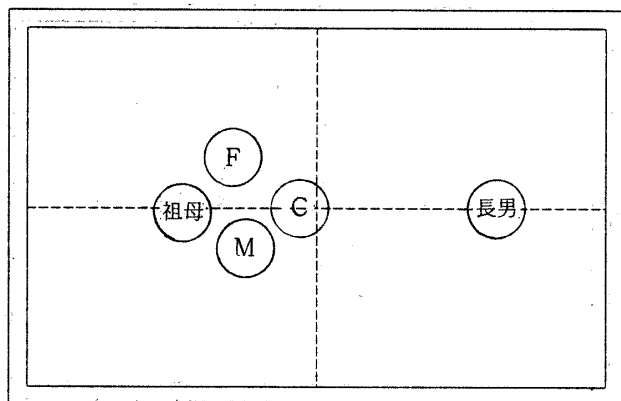


図3-g マキコの家族(マキコが誕生してから)

《マキコが生まれて、どうなったか》

父親「メチャクチャだった。それで、こう寄ったんだね。それまでは話題にすることがなかった。たわいもない話ばかりだった。」(図3-g)

母親「大変は大変だった。」

父親「仕方ないことだから、自然流に受け止めた。」

〔将来〕

母親「むずかしいが、マキコが身辺自立できる程度になってほしい。両親と長男はつかず離れずで、基本的には、このまま現在の調子でやってゆきたい。」

b) この家族のまとまりの構造

療育グループに参加を決めるまでのマキコの両親は、共稼ぎであり、マキコの兄は保育園へ、マキコは近所に住む祖母に預けられていた。療育グループに通い始めてからもしばらくは、祖母同伴で通ってきていた。マキコと接するにやや不安を残す母親と比べ、祖母の方がむしろ安定しているという印象を、私どもも抱いた。この頃は、日常的にも祖母の援助なしで、マキコを介助していく自信がなかったということも、母親自身も述べている。この母親にとって、祖母から自立し、“マキコの母となること”は、ひとつの大きな課題であったようだが、私どものグループに参加し始めて3ヶ月目に、夏の合宿を機として、祖母の手を借りずに療育活動にも通うようになって、私どもの目に触れる行動水準においても、自立的になったことを示してきた。その後、療育グループの他の母親たちとの触れ合いの中で、多少固さの残っていた動きが、しだいに伸びやかになっていく。既成の概念的な“母親とはかくあるべし”というイメージの枠組みから自由になって、マキコの母親としての“自分なりのあり方”とでもいうべきものを見出だしてきたように、私どもには理解された。

一方、父親はマキコの実質的な介護は母親にまかせて、一貫した距離をとっていたと見てよいであろう。ただ父

親のいわゆる“気持ちの上では”マキコと母親の方に意識が向いており、母親もそのことを理解し、そのことによって一定限の安心感を得ている。そうした両親の意識面での焦点がマキコにあてられる。マキコの生まれたことは、そうした“精神的な意味で”父親の気持ちを常に母子に向けさせ、母親が父親に接近し頼りにするという構造を作らせ、家族内での凝集性を高めたといえる。行動的、実質的な水準では、マキコのことに関しては、母親が主導権と決定権をもっており、父親もそれを尊重している。

小学校3年生になったばかりの兄は、客観的に見ても自由で自立的である。両親も“放ったらかし”というように、母親の目が主にマキコに向けられていることが、この兄をのびのびさせるために意味があったのかもしれない。現在のところ良い意味でも悪い意味でもマキコの存在を気にすることなく、両親のいわゆる“自然流”を受け継いで、マキコを受け止めているとみられる。そうした兄の自然な態度が、両親を安心させ、この子に対するつかず離れずの心理的距離をとらせることになっているものと思われる。

マキコの家族の場合は、マキコの出生によって、家族4人が共通の課題に取り組む必要から寄り集まったが、マキコの介護を引き受けるという現実的な対応は、近所に住む祖母が、とりあえず肩代わりすることにならざるを得なかった。そうした状態の中から、母親が主体的にその役割を取り戻す過程において、両親間の精神的つながりが確認され、安定感を得ていき、兄もその発達に伴って、しだいに距離をとれるようになっていく。こうした流れに対応する祖母の動きも、また実に適切であり、現在は直接関与はしていないというものの、側面的には、母親に安定感を与える存在であるように、私どもには感じられている。

3. ノブコの家族

a) 家族成員布置テストを用いた面接の要点

《 》は療育者による質問の要旨である。

ノブコの1日遅れの誕生祝いを兼ねて、我々が招かれた時、面接が実施され、父親主導で進んだ。

〔現在〕

母親「どういうふうにする。」

父親「部屋の感じで。」(画用紙の枠を居間として、普段の家族の居場所にチップを置いていく)(図4-a)

母親「お父さんは隅に追いやられているかんじ。ヨシフミ君のところみたいにノブコは真ん中にはいない。お姉ちゃんはお父さんの前を行ったり来たり、妹は私の回りにいる。」

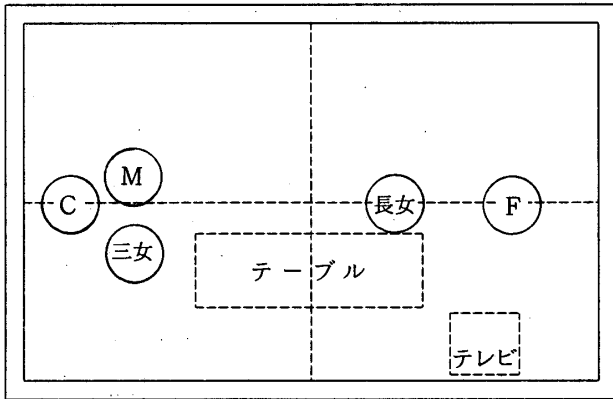


図 4-a ノブコの家族(現在)

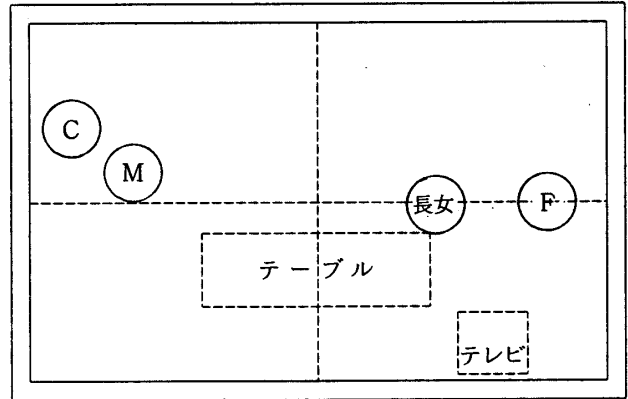


図 4-b ノブコの家族(療育参加前)

《それぞれの役割は》

父親「最近、お姉ちゃんが役に立つ。片付けや妹の面倒をみってくれる。お母さんとお姉ちゃんがいないと困ってしまう。」

母親「お姉ちゃんがいないと食事の用意もできない。」

《お父さんがいない時は》

父親「この頃パチンコに凝っている。お姉ちゃんが助けてくれるので、余裕ができたのかもしれない。」

《ノブコの位置については》

母親「ノブコは隅に追いやられている。定位置。」

父親「寝る時は、お母さんとノブコ、私とお姉ちゃんと妹。」

母親「妹は神経質で、ノブコが起きると一緒に起きちゃうから。夜はお父さんにまかせてある。」

父親「土曜、日曜は、なるべく家にいて、お母さんが外出できるようにしている。家の中にずっといるのはかわいそう。」

母親「羽を伸ばしに外へ。」

《大きさを変えると》

父親「お母さんが少し大きくなる以外は、変わらない。お母さんがいないとてんでこまいだから。」

〔療育参加前〕

《3年前は》

……沈黙……

父親・母親「どういうふうだったっけ」(図4-b)

母親「ノブコに付ききりだった。」

《今よりノブコに近かった》

母親「妹がいな分。」

《妹が生まれてからの変化は》

父親「そんなに変わらない。」

母親「ノブコが健康だったら、妹はいなかった。」

《妹を産もうとしたのは》

母親「お姉ちゃんの遊び相手がいると思ったし、療育グ

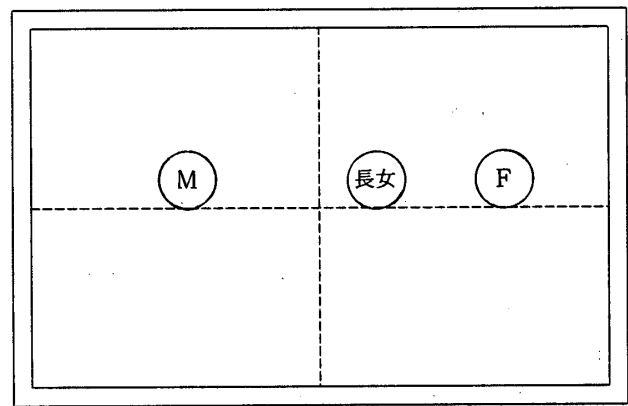


図 4-c ノブコの家族(ノブコの誕生日前)

ループの他の家族で第3子を産んだ人の影響もある。お姉ちゃんの時は、あっという間に子育てが終わってしまった。もう一度、じっくりと成長していくのを見てみたかった。変化がほしかったこともあるし。」

《変化というのは》

母親「それなりに家が安定してきて、余裕が出てきたから。ノブコが生まれてすぐは大変だった。ノブコの様子も安定して、あまり変わらないし、お姉ちゃんも自分でできるようになってきたから。」

《第3子を産むのに決断は》

父親「また苦勞するかと思ったが、お母さんも家にいるし、1人増えたとして、とも思った。お姉ちゃん1人ではかわいそう。」

《育児は楽しい》

父親「あの子が寝てしまうと寂しい。ユニークな家の中心。笑いの元で家中をかきまわしている。」

《ノブコの誕生日前》(図4-c)

母親「お父さんの比重が大きかった。」

父親「そうでもないけど。3人、川の字になって寝ていた。ノブコが生まれて、2階で私とお姉ちゃん、

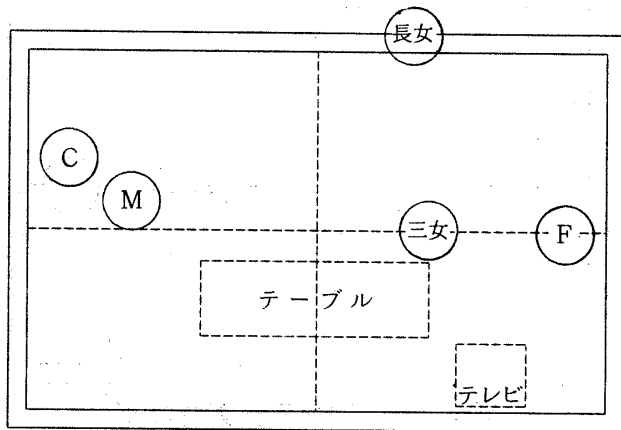


図4-d ノブコの家族(将来)

下でノブコとお母さんになった。」

〔将来〕(図4-d)

父親「ノブコがいろいろと犠牲になってしまう。外出する時も、置いていかれることもあるだろう。大きな車がほしい。」

父親・母親「だんだんお姉ちゃんたちが離れていく。」

《ノブコは》

母親「今と一緒にいい。」

b) この家族のまとまりの構造

家族で行動する場合も、両親間のどちらかに明確な主導権があるというわけではなく、ノブコの存在を受け止めるのに、信条や信念があるわけではなく、ノブコが生まれた時にその存在を受容し、家族を連帯させたのは、しいてあげれば両親間の思いやりとあってよいかもしれない。ノブコが生まれた時のショックを、それぞれが“相手の方のショックが大きかったら”と考えることによって乗り越えることに、それは象徴されるだろうか。私どもが共通して、この家族に対して感じる“ほのぼのした雰囲気”が、そのまとまりのあり方を示しているといえる。

療育グループに通い始めた頃のノブコの父親は、ハングライダーに凝っていて、また最近ではパチンコに凝っているという。それは、この父親にとってはノブコの存在を深刻に受けとめすぎないでいたいという気持ちの反映として理解すべきであろう。

療育グループに通うようになった年の終わり頃、他の母親に刺激された形で第3子出産を決めた。“ノブコが居なかったら、この子は生まれなかった”と両親が述べるように、この決断は、この家族の力動関係のバランスをとり、安定化させるために、重要な意味があったと理解すべきである。“一度、ゆっくりと子育てを楽しみなかった”と母親は語っているが、子育ての手応えや実感を得ることは、自己の母性を確認することにもつなが

る。それは、気持ちの余裕を得て初めて可能となる決断でもある。

ノブコが生まれたことにより、ノブコは母親が介護をし、姉との接触は父親にまかされるという形での役割分担がそれとなくできていたようである。姉と父親との関係は比較的緊密となっており、現在では、父親にとっても“いないと困ってしまう”というほど家庭内で重要な位置を占めるに到っている。しかしながら、父と姉、母とノブコという2つのグループが家族内に成立しているというこの形は、中核となる存在を欠いているとの感もまぬがれない。以前ノブコが家族の中心とはいついたものの、家族間の交流を刺激し、まとまりの核となるほどには、この家族におけるノブコの存在は、強力ではない。第3子である妹の出生は、ノブコの存在と相互関連をもちながら、家族の凝集性を高めることともなり、そうしたきょうだいの存在が、バランスをとってのまとまりを深め、さらに家族間の交流を活性化するための核を作ることになったといえよう。

IV 考察

本報告の3家族は、それぞれのあり方は異なるものの、十分夫婦仲がよく、子供の生き方を考え合っている。私どもの考えてきた3タイプの中で、ヨシフミの家族はタイプI『障害児自身を中心にまとまる家族』に対応し、マキコの家族はタイプII『障害児を世話する母親を中心にまとまる家族』、ノブコの家族はタイプIIIの『健常児きょうだいの存在によりバランスをとってまとまる家族』にあたるものと考えられた。

以下、この3タイプの家族としてのまとまりのあり方を改めて位置づけてみたいと思う。

タイプI：タイプIの家族では、家庭のまとまりの中核が障害児自身であると明確に自覚されている。

ヨシフミの両親は、ヨシフミが出生し、障害児であることが分ると同時に、「神様が私達だからこそ授けてくれた子供」として受け入れる。こうしたあまりにも積極的な障害児受容は、療育者としての私どもにも俄かには共感しがたいものではあるが、確かにこの家族に息づいたあり方であることが知られる。そして、ヨシフミの誕生が同時に父親の人間観、人生観に転機をもたらすものであったようであり、これまで経済観念を中心に生活していた人が、人の情けが心に染み入る経験に目を向けていくようになる。わずかの気温の差が生命をも脅かしかねない我が子をもって初めて生命の尊厳を教えられたとして生きる父親である。このような父親のあり方が強く印象づけられる家庭であり、母親は父親の考えに全面的に従っていることは、面接行動でのチップの置き方が父

親主導であったことにも反映しているように考えられる。しかし一方的に支配的というのではなく、母親とヨシフミを支え、直接に子どもを世話する母親を配慮する父親である。

障害児をもつ家庭において、父親がこうした人間理解をもつことは、母親の心理的負担を軽くしていると容易に推測されるものである。そして、母親も人間関係をうまく切り盛りしていける人として、ぴったり組み合った夫婦であるといえる。このように母親にとっても、父親にとっても、日頃の生活そのものがヨシフミを中心に動いており、ヨシフミあっての家庭といわざるをえない。図2-bに、それが表現されている。

さて、障害児をもつ親への心理的援助目標の1つは障害児受容のあり方である。確かに、我が子の受容が深い親ほど生き生きと生活してゆくと、感性の豊かさを治療者に印象づける。しかし、そこに至る過程は、通常多くの場合、幾度となく悲しみ、不幸を呪い、時には自殺にも走りかねず、それでも気を取り直して生きていくという苦悶の歩みがあってなされていくものなのである。

こうした過程がヨシフミの両親からは語られない。“人が生きるということの意味”を深く見つめ続けてきた父親の人生観が、ヨシフミの存在を中核においての生活信条となって実現されてきているが故であろうか。父親の確固たる信念と、それを受け入れる側の母親の感性と受容性が、ここまで深い障害児受容に達しているといえよう。私どもの経験する限りにおいて、こうしたまとまりを示す家族は比較的少数例である。それは障害をもって生まれた我が子に感謝と畏敬の念すらを抱くことのできる感性と、それを支えるひとつの明確な信念あるいは人生観をもつことによって達成されるような家族のまとまりであるといえることができる。

タイプII：このタイプは、障害児を中心にしていることには違いないが、それにもまして障害児と直接かかわる母親の動きが、家族にまとまりの推進力になっていると考えられる家族である。

マキコの家庭は、療育集団への参加を通して、まず第1に子育てに関して、それまで祖母に依存することの多かった状況から、母親の自立を促していったことがあげられる。

(図3-g, さらに図3-dから図3-fへの変化)

母親がマキコの養育を祖母に頼っていたことは、母親自身の成長過程の問題を背景としながらも、夫である父親のマキコを受け止めるあり方が、消極的に留とまっていたために十分な支持を得られていないと感じていたことによる。この母親が療育グループに参加し始めて、家庭に変化がもたらされたことを後藤・村上(1983)は

次のように報告している。

(父親は)母親が安定し、父親に対してマキコのことで要求することも出てきて、マキコ自身にも変化のきざしが見られたということで、療育グループへの関心を高めていった……1年の間に“母親を通して、家族全体に明るさや刺激が伝わった”という点において、父親はグループ活動の意義をもっとも評価しているようである。

ここに、母親の動きを通して父親が療育をかなり積極的に考えるに至った経緯が見てとれる。

この家庭で母親が中心であることは、今回の面接の中でも明確に認められた。それは面接行動としても、チップが母親主導で置かれていったことにもみられる。父親は、やや傍観者的で、助言はするが、最終決定は母親自身ですと言いきる母親である。家庭内の大きさのイメージ(図3-c)での、マキコを包みこむ大きな母親は、その果たす役割の大きさを如実に物語っている。しかし一方父親には、はっきりと心理的に支えられているのである。

このように母親がまず自立的になり、家庭内のリーダーシップをとっていく場合に、このタイプのまとまりが作られやすいように思われる。

タイプIII：このタイプの家庭は、表面的には障害児がまとまりの中心として印象づけられない。

ノブコの家庭でももちろん両親の協力体制がある。子どもの養育を母親だけにまかせず、父親もそれを分担し、母親の負担を軽くするような配慮は一見なされている。

こういった両親のパートナーシップを背景に、この家庭で特徴的となるのは、健常児きょうだいの存在である。現在、この療育に加わってから出生した三女が一家の中心的存在で、家庭が明るくなっている。ちょうど2歳というかわいい盛りということもあるのだが、彼女に対する両親の期待も大きい。これまでノブコに付ききりであった状態から、それぞれ子どもたちのこれからは見通しがつき、もう1度落ち着いて、子育てを味わいたいという欲求が示される。これはこの療育活動に、これまで参加してきた他の家族にもよく見られたことで、障害児をもつ家庭に、ある程度共通するもののように思われる。この両親も、同時期にこの療育グループに参加し、今はこれを巣立っていった他の親が第3子を設けたことにも促されて出産を決意したのである。

この両親では、タイプI・IIのように障害児であるノブコのみが特別に意識されておらず、他のきょうだいと同等の重みで扱われ、それらとの関係の中でバランスをとった上での家族まとめの方向にあるものと思われる。確かに、このタイプでは、それほど強く気負って主義・信念をもって障害児を受容しているとはいえないが、きょ

うだいがいることで、親も救われたような感じになって、生活の上での気力を得ていると考えられ、いわば日常的な「普通」の家族としての生活が営まれていくことが予測される。それはまた、それなりに望ましく健全な家族力動のまとまりとってよい。

障害児をもつ親が「この子がいてくれたからこそ、………」といった、それまでの枠に縛られない人生を送り得るように思われるタイプⅠは障害児をもつ家族のまとまりという点でひとつの典型である。障害児を持つことによって安定した家庭を築いた家族は、まちががなく、この感慨を人生の糧にする。このことは本報告のどの家族からもある程度認めることはできるものの、すべてがすべてその歩みを伴うものではない。それとはいくらか趣を異にした家族心理力動の安定・まとまりのあり方がタイプⅡ・Ⅲに見られるのである。

従来はタイプⅠのまとまり方への援助がモデルとして強調されてきたことは確かである。それは理想的な姿なのかもしれない。しかし、現実に私どもの療育グループに1980年以降に参加した、その他の家族をみると、タイプⅠは1家族に過ぎない。タイプⅡにあたるのが4家族、タイプⅢにあたるのが5家族であるといった分析を通して、やはりタイプⅠにあたる家族は、むしろ例外的ではないかとも考えられる。

障害児をもうけて、それぞれ家族のあり方の危機を乗り越え、障害児を中心に生活しているのではあるが、そのあり方として上記の3タイプの家族のまとまり方がある。そのそれぞれに応じた、よりきめ細かい家族への援助方法の確立こそが今後の私どもの課題である。

本研究にあたっては、昭和59年度の共同療育者として、現名古屋大学教育学部研究生、後藤由美子、板倉由未子、水谷真、現名東ワークス、藤本純子の諸君の協力を得た。ここに感謝の意を表するものである。

文 献

- 後藤秀爾・鈴木靖恵・佐藤昌子・村上英治・水野博文・小島好子 1982 a 重度・重複障害幼児の集団療育(3)——健全児きょうだいの発達課題——名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 29, 205-214.
- 後藤秀爾・村上英治・鈴木靖恵・小島好子・水野博文 1982 b 重度・重複障害幼児の集団療育(4)——2人の母親の3年間の歩み——名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 29, 215-224.
- 後藤秀爾・村上英治・森崎康宣・加藤礼子・中西由里・水野博文 1983 重度・重複障害幼児の集団療育(5)——父親の療育参加をめぐる——名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 30, 121-144.
- 村上英治・中西由里・森崎康宣・後藤秀爾・加藤礼子・水野博文 1984 障害幼児療育における同窓の連帯をめぐる 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 31, 227-249.

(1985年8月12日 受稿)

ABSTRACT

A GROUP THERAPEUTIC PRACTICE
WITH SEVERELY MULTIPLE HANDICAPPED CHILDREN (7)
— The process toward the unity and stabilization for family dynamics —

Eiji MURAKAMI, Yasunori MORISAKI, Shuji GOTOH, Reiko KATOH, and Miyuki NAKA

The unity of family as a whole is especially important for the families with handicapped children. And we assumed three types of such unity through therapeutic practices. In this report we examined three cases of typical families of each type.

I) A family that is united around the handicapped child himself.

This type of family is united for the reasons as follows. The members of such a family think that the handicapped child is essential for them. They even have sense of gratitude toward him. And they have strong belief which produces such feelings.

II) A family that is united around the mother who takes care of the handicapped child.

It's easy for this type to be united if the mother is independent and takes the leadership of the family.

III) A family that is united, being balanced by the existence of his normal brother and sister.

The father and mother of this type of family don't have such strong belief that they should accept and support the handicapped child, and are encouraged to live by the existence of the brother or sister of the handicapped child. The family dynamics is united as, what is called, a "normal" family.

These results propose us a theme that we should get some views to correspond to each type of families sophisticatedly hereafter.